

福祉だより 信州



特集

学びと自治の拠点づくりを目指して
～長野市ボランティアセンターの歩み～

住民には力がある

～社会教育の伝統と地域福祉のつなぎ役として～

No.

804

2023 3・4月号

学びと自治の拠点づくりを目指して ～長野市ボランティアセンターの歩み～

「学びをととして生活や地域が変わっていく」
様々な分野の推進者が出会い意気投合。住民の力を発掘できるコーディネーター養成に、分野を超えて取り組み続けています。

Interview

小林 博明さん

Hironaki Kobayashi

元長野市社会福祉協議会 地域福祉課長

長野市生まれ。1973年長野市社会福祉協議会入職。1984年地域福祉係長、1995年福祉課長補佐、2008年地域福祉課主幹、2010年地域福祉課長。2011年に同会退職後は、長野県社協で地域福祉コーディネーター養成、長野県NPOセンターでは子どもの居場所づくりのほか、長野市地域福祉計画、小諸市地域福祉活動計画の策定などに関わる。現在、まちの縁側育みプロジェクトながの代表。ながのボランティア・市民活動支援ネットワーク副会長。



長野市ふれあい福祉センター

1970年代

「しらせ世代」の心に火をつける

1973（昭和48）年、小林博明さんは、長野市社会福祉協議会に就職しました。当時は職員7名の小さな団体でした。日本は高度経済成長の終盤、オイルショック（石油危機）による物価高の中、学生運動は下火となり、大人たちは若者を「しらせ世代」と呼んでいた時代。小林さんの心に火をつけたきっかけは、1976年、秩父市で開かれた日本青年奉仕協会主催の第4回関東ブロックボランティア研究会でした。

障害を持つ若者たちがボランティア活動を通して「つながろう、行動しよう」と訴えていました。参加した社協職員に対して、「給料をもらいながら、ボランティア活動に関われる。お前らプロだろ！」と激をとばされました。まっすぐなエネルギーに共鳴した小林さん。長野でボランティアの輪を拡げることが生涯の使命になりました。

学びの場「しんてらこやじゅく」

1977年、小林さんがまず手掛けたのは、長野市社協と長野県社協共催による県内初のボランティアスクールと、市内のボランティア交流会の開催でした。その内容をもとに「ボランティアかわらばん」も創刊しました。拠点の必要性を参加したボランティアの声として発信したのです（2023年現在475号）。

1978年、日本青年奉仕協会の職員を辞めて地元旧松代町でまちづくりを進めていた香山篤美氏や長野県社協の職員となっ

た小池正志氏らとともに「ボランティア広場」を結成。ボランティアの相互交流と市民の普及の場としての学びの場づくりや出会いの場「ふれあい広場」等の活動を展開しました。中でも「しんてらこやじゅく」は、自ら学んで自ら実践し、地域社会をどうつくり変えていくかを学習し、意識を変える「運動」でもありました。

テーマは環境問題、住民自治、歴史、平和など幅広く、今の時代にも通じる課題ばかりでした。こうした学びを通して、人と人がつながり、活動が生まれていきました。「わたぼうしコンサート」も、奈良たんぼの会の活動からの学びから生まれました。



しんてらこやじゅく

1980年代

活動拠点「どんぐりの家」とボランティアコーナーの誕生

1981（昭和56）年、国際障害者年には多くの障がいのある若者たちもボランティア活動に参加していました。施設入所以外に地域で利用できるサービスが限られた中、障がいのある人も若者も高齢者もみんなボランティアとして、ごちゃまぜで活動する魅力と活気がありました。

1982年、小林さんは有志と共に長野ボランティア協会を設立し、民家を借りて、自主的拠点「どんぐりの家」を開設しました。念願の自前の拠点でした。全国でも珍しかったミニハンディ・キャブの寄贈

※日本青年奉仕協会……JYVA【Japan Youth Volunteers Association】 ジバと呼ばれていた。若者のボランティア活動参加を支援するさまざまな事業を行う公益法人。1967（昭和42）年創設。2009（平成21）年解散。

を受け、車いすの人たちの移動手段としてボランティアが移送サービスも始めました。



どんぐりの家オープン

小林さんはボランティアの自主性や主体性を尊重し、社協とは違う動きを同時につくろうと地域での仕掛けづくりに東奔西走の日々を送りました。「社協の中だけではできないこともある。外部に別の組織をつくり、それを支援するスタンスで関わってきました」

実践者でもあり、支援者でもありました。

県内初のボランティアコーディネーター

この頃、長野市社協でもボランティア活動拠点の整備の機運が高まります。

1983年、県ボランティア基金の助成を受け、ボランティアコーナーの設置とともに、県内初となるボランティアコーディネーターが配置されました。コーディネーター第1号の山田千代子さんは、最初は何をやらばいいかわからず頭を抱えていました。そんなある日「私、朗読ボランティアをしたいのですが」とピンクの花柄のワンピースを着た女性がコーナーを訪れました。ボランティア第一号となった萩原美智子さんです。まもなく彼女はコーディネーターと一緒にボランティアセンター初のグループ「やまびこ会」を立ち上げました。窓口には、行き場のない相



県内初のVコーディネーター
右奥が山田千代子さん

談が次々に舞い込んできます。その相談事から次々と市民参加の活動が生み出されていきました。盲学校の先生の要望で、信濃毎日新聞の記事をボランティアが朗読する「やまびこテレフォン」(現在も活動中)や、「おじいちゃん料理教室」、「一人暮らし老人の会」の立ち上げも支援しました。

「ボランティアセンターは、地域づくりを進める市民の拠り所であり、市民の願いや活動の種を蒔き、育てる『苗場』です」と小林さん。

1987年、社協移転に伴い、社協会館1階にボランティアセンターがオープンし、講座の開催やグループ活動の拠点となりました。コーディネーターが機能し、市民主体のまちづくりに取り組んでいくボランティアセンターの体制が整えられていきました。

1990～2000年代

「ふれあい福祉センター」に夢が結実

1990年(平成2)、ボランティアの声を反映させ、相互の連携を図ろうと、約60団体が参加して「ボランティア連絡協議会」が設立。新しいボランティア活動拠点づくりの中核となりました。

そして、1994年、待望の長野市ふれあい福祉センターが誕生します。1階フロアはボランティアセンターが占め、2名のボランティアコーディネーター(夜間はアシスタント3名)が相談対応にあたり、全国でも有数の機能を持つ拠点が実現しました。小林さんが15年前に描いた「ボ

ランティアビューロー」の夢が形になったものです。

センター運営にもボランティアが参加、窓口業務を支援する「よりいいかい」、センターの在り方を検討するボランティアセンター運営委員会、ボランティアかわらばん編集委員会など、様々な活動が展開されていきました。

1998年の長野パラリンピックとアートパラリンピックでは、「ながの・パラ・ボラの会」などが結成。市民参加による国際イベントの下地となりました。

2001(平成13)年のボランティア国際年には、ボランティア連絡協議会を中心とする推進協議会が組織化され、障がいのある人や外国籍の人たちとともに、記念イベントの運営やビデオドラマなどを制作。長野からのち輝く社会実現へ向けてメッセージを発信しました。

ボランティアセンターの力を 市内各地域に

人口の高齢化が進む中で、1989年にスタートしたゴールドプランにより、長野市でもホームヘルパーの増員、正規職員化が進められました。長野市社協も地区社協を基盤とした有償在宅福祉サービス(地域福祉サービス事業)を立ち上げ、それに合わせて、地域の実態調査やボランティアの協力者の発掘など小地域の福祉活動展開に取り組みことになりました。

長野市社協の在り方を検討する委員会を立ち上げ、福祉推進員の設置や、小地域福祉推進委員会の立ち上げ支援など、地域福祉

の推進に力を入れていきます。

そのためにはボランティア活動を全市に根づかせ、専門性と広い視野をもつ市民リーダーの知恵と力を反映した事業づくりが不可欠でした。

人づくり・子育てとして、ボランティアアドバイザーや、市民活動プロデューサーの養成講座などを開催。体験学習やワークショップを取り入れた実践的なプログラムは全国的にも注目されました。また、ボランティアグループへの助成金の審査選考に公開プレゼンテーション方式を導入したことも活動団体の意識を高めました。

2023年 大河へ

「学び、動き、伝える」

長野市ボランティアセンターで育ったボランティアリーダーたちが、居住する地区の住民組織と関わりながら、各地区の地域活動を活性化していく。小林さんはそんな住民主体の地域福祉を目指してきました。

「社協は、広く市民が集う協議体であり、みんなの幸せづくりの仕掛けの場です。いくつかの事業を組み合わせ、連携させていくことで、新しい取組が展開できます」社協を退職した今も、地域活動やまちづくり活動に取り組み続けながら、若い世代の活躍に大きな期待を寄せます。

「地域の人々がどんな思いで生活しているのか、地域の声を聞くことがなにより大事です。そこではか得られない情報というものがある。実態を知り、それにどう向き合うか考え、行動できるように、私たち自身も学びを続けていきたいですね」

※奈良たんぼの会……重度の身体障がいをもつ人の保護者たちが、子どもたちが養護学校卒業後に地域と関わりあいの持てる居場所を自分たちでつくろうと「たんぼの家づくり運動」を市民運動として展開し、1973(昭和48)年に「奈良たんぼの会」が発足した。HP <https://tanpoponoye.org>
※ボランティアセンターの体制整備……1985年～1986年、国のボラントピア事業の指定、それ以降は市単事業として実施。

住民には力がある ～社会教育の伝統と地域福祉のつなぎ役として～

「地域づくりを進める市民の拠り所であり、市民の願いや活動の種を蒔き、育てる“苗場”を創りたい。拠点づくりの夢を描き、計画し、実現した先人たちのものがたりです。

Interview

木下 巨一さん

Norikazu Kinoshita

前飯田市民館副館長



飯田市や長野県の職員として「社会教育＝大人たちの対話による『学びほぐし』」の仕事に長らく関わる。豊かな人生・地域・社会を自らが主役となって創造するための学びは地域の人やグループの活動の中にこそ見つけられると感じ、そういった現場や人と子どもたちをつなげることをライフワークとする。近著に「人生100年時代の多世代共生（牧野篤編：東京大学出版会）」「地方自治の未来を拓く社会教育辻浩・石井山竜平編：自治体研究社」など。



高校生講座カンボジアスタディツアー

1990年代

公民館主事として

「イベント屋デビュー」

飯田インター近くの飯田市伊賀良地区にバイパスが開通した翌1987（昭和62）年、沿道の地域一帯を会場に開通記念の駅伝マラソンが盛大に開催されました。国道工事事務所からの依頼を受け、イベントの事務局を支える木下巨一さんの姿がありました。

飯田市職員になって7年目。それまで税の職場でシステム開発の業務をしていましたが、もっと達成感のある仕事がしたいと人事担当の総務部に願い出て、配属されたのが社会教育に関わる公民館主事でした。

京都の大学に進学し、深夜の料亭で賄いのアルバイトをして学費と生活費を工面しながら、勉強に明け暮れる日々。専攻はマルクス経済学。アルバイトを通して社会の課題やひずみを体感し、市職員になってからは労働組合の運動にも参加。現在の「格差問題」にも通じる体験は、社会教育に対する向き合い方にも影響を与えました。

公民館講座で「ジェンダー問題」

学びから地域が変わる実践へ

木下さんの最初の転機は公民館主事になって4年目の1990（平成2）年。30代女性による若妻会の存続問題を相談されて企画した女性学講座でした。若妻会が地域に必要などうか、女性固有の生き方から考えようと、会の役員とともに開講した学習会で、延べ100人が参加し、学びを深

めました。

当時、伊賀良地区はリンゴなどの果樹園が広がり、農家の「嫁」は畑で働き、家に戻れば子育てや家事が待っている、収入はの取り分が決まっていなかった。そして介護は専ら「嫁」の役割。今なら「クワトロワーク」で、地域における女性の地位は極めて低い実態を初めて知ります。

「同じ立場、同じ家に暮らしている夫婦でも価値観を共有していることは絶対にありえないということを学びました」。

地域の女性たちが自分たちの置かれた状況について考え、講座を組み立て、自主的に学ぶ取組は県内でも先駆けとなりました。

「高齢化」「介護」の課題に向き合う

講座の学習テーマに取り上げた一つが親の介護と老後の支えです。当時、介護は「嫁の役割」とされる傾向が強く、住民の大きな心配ごとであり、特に女性にとっては一番の課題でした。そこで、女性学講座に続いて介護に焦点を当てた連続講座を始めました。

この頃、福祉分野では「公・共・民」の役割分担による安心と支え合いの長寿社会が目標となっていました。一方で、女性の社会進出意欲の高まりとあわせて、「介護の社会化」への機運が高まっていき、2000（平成12）年の介護保険制度創設につながっていきます。

「市民大学福祉講座」は大きな関心を集め、公民館で羽田澄子監督の「安心して老いるために」上映会を企画。1000人あ

*公民館の設置区分……公立公民館は、市町村が設置。中央公民館（本館）と市町村の一定区域を対象区域として設置する地区公民館がある。自治公民館は、町内会や自治会などが管理・運営。県内の市町村では、一般的に自治公民館のことを「分館」と言い、他には町内公民館、地域公民館の呼称を使う場合もある。地域住民の暮らしにより密着して自治会（町会）の活動や地域行事の活動拠点となる「自治公民館」を支援することは、公立の「公民館」の大事な役割。

まりの観客を集め、地域住民が我が事として福祉を考える機会となりました。

中国帰国者との出会いから 多文化共生の事業に取り組み

1995年に飯田市で平和フォーラムが開催されることとなり、満蒙開拓を体験した中国帰国者にインタビュー取材したことがきっかけで、帰国者家族が言葉の壁で大変苦労している事実を知りました。そこで、1997年、帰国者のための居場所と日本語学習の拠点を目指し、公民館事業として初めての日本語教室を開講しました。以後、飯田市公民館の日本語教室は、多文化共生推進事業として続けられています。

「マイノリティとがマジョリナルな立場に置かれている人と、そうでない人の間には大きな隔たりがあり、そうした視点から世の中のもの事を見ることが、社会教育に携わる者にとって大事なことだと強く実感しました」と木下さんは振り返ります。

ジェンダー問題の講座と多文化共生の取



日本語教室わいわいサロン

組は、その後、飯田市の政策にも反映されました。農家の働き方改革となる「農家の家族経営協定」の制度につながり、数多くの世帯が協定を結びました。また、女性労働をテーマにした部会のメンバーの中から何人も女性市会議員が誕生。市の担当課の新設にもつながりました。

「公民館での学びを通して地域の生活を変えられることができることを住民に気づいてもらえたのではないかと思います」

全国一の公民館数を誇る信州 地域の拠り所として

公民館は、戦後復興のため「民主主義の茶の間」として、文部省の官僚寺中作雄らが政策化しました。中でも長野県は、行政立でない自治公民館(分館)を含めると3800館以上あるとされ、全国1位を誇っています。

そこには、学びを大事にし、生活共同体を基盤として自分たちの力で復興していく拠点として公民館を位置付けた信州の風土があります。地域の活性化に取り組む自治公民館が存在感を発揮しているのも信州の特徴で、とりわけ飯田下伊那は公民館草創期の姿を色濃く残していると言われます。

木下さんは、そうした信州人の公民館への思いと伝統を感じながら、学びから地域が変わる実践に取り組み続けました。

10年間で3カ所の公民館主事を経験。その後も「社会教育畑」を歩き、地域の将来を見据え、子どもや若者を地域で育てる次世代育成の先駆的な実践を展開し続けました。



2020年代 大河へ

「学びと自治」のスローガンで 社会教育と地域福祉をつなげる

2017年、定年を機に縁があつて、長野県の職員となったことは、次なる転機となりました。

県職員となつてももなく、長野市ボランティアセンターを立ち上げた市民主体のまちづくりの達人たちと出会い、意気投合。当時の長野市社協の小林博明さんや戸田千登美さんたちと関わる中で印象に残った言葉が、「住民は大きな力を持っている」「答えは住民が知っている」でした。

公民館で実践してきた理念を共有し、新たな気づきを与えてくれる仲間との出会いは、公民館とは、自治の担い手と支え手が育つところである」と唱える木下さんの社

会教育への熱い想いは、「学びと自治」にまとめられ、長野県の中期計画のスローガンにもなっています。

「学びと自治」の精神を広げるために「まちづくりボランティアフォーラムのような場で実践ベースで分野の違う人たちが混じり合うことは、とても意義のあることです。垣根を越えたつながりを地域の仕組みとして残していきたいと考えています」と木下さんは話します。

「地域には人と人をつなぐコーディネーター力を持った人材が潜在しています。社会教育を通してそんな人材を発掘できる若い人たちを育成していきたいと思っています。社会教育を学んだ人たちが福祉の世界で活躍することを期待します」

「地域共生・信州～源流から大河へ」が本になります！



長野県社協では、市川一宏先生(ルーテル学院大学教授)の呼びかけによる「信州の地域福祉研究会」とのコラボレーションにより、20人の地域福祉実践者たちの歩みを「信州の地域福祉の歴史」にまとめる作業を行っています。この「源流から大河へ」の特集の内容も、加筆して物語に加えていく予定です。

**2023年5月 刊行予定
ご期待ください！**

日本国内でのボランティア活動中のケガや賠償責任を補償!!

令和5年度

ボランティア活動保険

商品パンフレットは
こちらから
(ふくしの保険ホームページ)



保険金額・年間保険料（1名あたり）

団体割引20%適用済／過去の損害率による割増適用

保険金の種類		プラン	基本プラン	天災・地震補償プラン	特定感染症重点プラン	
ケガの補償	死亡保険金		1,040万円			
	後遺障害保険金		1,040万円(限度額)			
	入院保険金日額		6,500円			
	手術 保険金	入院中の手術		65,000円		
		外来の手術		32,500円		
	通院保険金日額		4,000円			
	賠償責任補償	特定感染症	補償開始日から10日以内は補償対象外(*)		初日から補償	
地震・噴火・津波による死傷			×	○	○	
賠償責任保険金 (対人・対物共通)			5億円(限度額)			
年間保険料			350円	500円	550円	

*3月末までに契約手続きが完了し、前年度から継続して契約される場合は初日から補償します。

<重要>

- ◆基本プランでは地震・噴火・津波に起因する死傷は補償されません。
- ◆特定感染症重点プランでは中途加入の場合でも補償開始日より特定感染症が補償対象となります。
- ◆年度途中でご加入される場合も上記の保険料となります。
- ◆中途脱退による保険料の返金はありません。
- ◆途中でボランティアの入替や、ご加入プランの変更はできません。
- ◆ご加入は、お1人につきいずれかのプラン1口のみとなります。



ボランティア行事用保険

送迎サービス補償

福祉サービス総合補償

(傷害保険、国内旅行傷害保険特約付傷害保険、賠償責任保険)

(傷害保険)

(傷害保険、賠償責任保険、約定履行費用保険(オプション))

●このご案内は概要を説明したものです。詳細は、「ボランティア活動保険パンフレット」にてご確認ください。●

団体契約者 社会福祉法人 全国社会福祉協議会

〈引受幹事〉 損害保険ジャパン株式会社 医療・福祉開発部 第二課
TEL: 03 (3349) 5137
受付時間: 平日の9:00~17:00 (土日・祝日、年末年始を除きます。)
この保険は、全国社会福祉協議会が損害保険会社と一括して締結する団体契約です。

取扱代理店 株式会社 福祉保険サービス

〒100-0013 東京都千代田区霞が関3丁目3番2号 新霞が関ビル17F
TEL: 03 (3581) 4667
受付時間: 平日の9:30~17:30 (土日・祝日、年末年始を除きます。)

(SJ22-12223より抜粋して作成)

令和5年度

社会福祉施設
総合損害補償

しせつの損害補償

インターネットで保険料試算できます

ふくしの保険

検索

老人福祉施設、
障害者支援施設、
児童福祉施設などに

スケールメリットを活かした割安な保険料で
充実補償をご提供します!

◆加入対象は、社協の会員である
社会福祉法人等が運営する社会
福祉施設です。

プラン1 施設業務の補償

(賠償責任保険、動産総合保険等)

① 基本補償(賠償・見舞)

保険期間1年

▶保険金額		基本補償(A型)	見舞費用付補償(B型)
賠償事故	身体賠償(1名・1事故)	2億円・10億円	2億円・10億円
	財物賠償(1事故)	2,000万円	2,000万円
	受託・管理財物賠償(期間中)	200万円	200万円
	うち現金支払限度額(期間中)	20万円	20万円
	人格権侵害(期間中)	1,000万円	1,000万円
	身体・財物の損壊を伴わない経済的損失(期間中)	1,000万円	1,000万円
	徘徊時賠償(期間中)	2,000万円	2,000万円
お見舞い等	事故対応特別費用(期間中)	500万円	500万円
	被害者対応費用(1名につき)	1事故10万円限度	1事故10万円限度
	傷害見舞費用		死亡時100万円 入院時1.5~7万円 通院時1~3.5万円

●この保険は全国社会福祉協議会が損害保険会社と一括して締結する団体契約(賠償責任保険、医師賠償責任保険、看護職賠償責任保険、雇用慣行賠償責任保険、役員賠償責任保険、サイバー保険、普通傷害保険、労働災害総合保険、約定履行費用保険、動産総合保険、費用・利益保険)です。

●このご案内は概要を説明したものです。詳細は「しせつの損害補償」手引またはホームページをご参照ください。●

団体契約者 社会福祉法人 全国社会福祉協議会

〈引受幹事〉 損害保険ジャパン株式会社 医療・福祉開発部 第二課
TEL: 03 (3349) 5137
受付時間: 平日の9:00~17:00 (土日・祝日、年末年始を除きます。)

取扱代理店 株式会社 福祉保険サービス

〒100-0013 東京都千代田区霞が関3丁目3番2号 新霞が関ビル17F
TEL: 03 (3581) 4667
受付時間: 平日の9:30~17:30 (土日・祝日、年末年始を除きます。)



プラン1 オプション5 施設の感染症対応費用補償

休業補償から各種対応費用までワイドな安心

- ① 休業や縮小営業による収益減少はもちろん、収益減少を防止・軽減するための人件費なども補償
- ② 消毒・清掃費用や自主的なPCR検査費用など、かかった費用を幅広く補償
- ③ 感染症対応特別費用で定額20万円を早期に受取り

プラン2 施設利用者の補償

プラン3 職員等の補償

プラン4 法人役員等の補償

(SJ22-12033から抜粋)



地球に暮らす地球人 人に、地域に馴染んでいく



青い空に、雪を頂くふたつのアルプスが映える駒ヶ根。キリリとした空気に混ざって、温かくにぎやかな声が駒ヶ根市ふれあいセンターから聞こえてきました。この日は「地球人ネットワークinこまがね」の活動日。駒ヶ根に暮らす、海外から来た人たちの「わからない」「困っている」に合わせて日本語を勉強したり、交流会を行ったりしています。

2006年から始まったこの活動。始めたきっかけは、民生委員からの「外国籍の人のゴミ出しについて困っている」という一言でした。そこから、地域のやり方を一方的にその人に伝えるのではなく、「まずは楽しむ、お互いに知り合う」ことで、人や地域に馴染むことを大切にしようと、外国料理を教えてもらい一緒に作って食べる等の交流会から始めたそうです。今では「日本語教室」「交流イベント」「生活情報講座」に分かれて活動を行っています。この日は日本語教室。集まった会員とボランティアが4～5人に分かれてテーブルに座り、「今日は何がしたい?」「何か困っていることはある?」などの問いかけから、来た人に合わせて日本語などを学んでいます。4月から移住されたゼボさんは、日本語がわからず漠然と困っていましたが、この日本語教室に出会い、今では話せるようになり、LINEも使えるようになりました。出産のため、しばらく休んでいましたが、この日は赤ちゃんを連れて来てくれました。思わぬゲストに皆さん大賑わい。赤ちゃんが引き寄せるパワーは万国共通だと感じつつ、まるで親戚同士の集まりに来ているかのような、温かく安心できるつながりが見られました。

代表の高森アナさんは「地球人は自分のチカラになった場所。駒ヶ根に仲間や、家族が増えたことが嬉しい。代表になってほしいという話をもらったときは自信がなかったけれど、自分が楽しまないと動けないから、まずは自分が楽しんでみんなと一緒にこの地球人を続けたい」と思いを語ってくれました。代表になる前は会員だったアナさん。「外国の人が活躍してださる会にしたい」と当時のスタッフで話してアナさんを代表に大抜擢。今では7年ほど代表を続けています。

単に日本語や地域のルールを一方的に伝えるのではなく、まずは人を知り合って、楽しんで、そこからお互いに教え合い、学び合う。そこには壁や溝はなく、集まっているのは、ズバリ!“地球人”でした。



2022年 信州共生みらいアイデアコンテスト



エントリー
作品の紹介

～ 福祉のイノベーション「ふくし × 若者 × 企業団体」～

学びと技術を活かして、福祉・介護の課題解決を通し地域に貢献しよう

各チームの作品等をHP上に掲載しております。ぜひご覧ください。

学校名	チーム名	作品
池田工業高等学校	グランメゾン池工ワンチームカート	池工版デュアルシステム グランメゾン池工ワンチームカート
長野工業高等学校 (家庭科)	ポヨヨグラム	よりよい防災マップ
長野工業高等専門学校	ちょいまー	時間管理支援デバイス「ちょいまー」
上田千曲高等学校 (機械科・電子機器科)	ユニバーサルカッター制作班	ユニバーサルカッター
上田千曲高等学校 (生活福祉科)	OHTお仕事ひろめ隊	
	No jobs	
	チーム純子	

福祉分野でもイノベーション(技術革新)が、ますます求められています。本企画では、理工系など様々な分野で学ぶ学生の日頃の学びがくらしの課題や地域課題の解決、新たなイノベーションの始まりとなることを期待しています。

「ふくし×若者×企業団体」県内の企業・福祉のプロによる私のイノベーション「学びの講座」を上田千曲高校機械科にて開催

【問合せ先】 アイデアコンテスト事務局 (長野県社会福祉協議会)



福祉大学校 介護福祉学科

ケ

アコン2022の入賞
チームのうち、8チ
ムが学生でした。

入賞した学生チームを
「みらいを担うふくしび
と」として、学校ごとに
紹介します。

長野県福祉大学校は、保育学科と介護福祉学
科を設置している専修学校（専門課程）です。

介護福祉学科では、保育士の資格を取得後
に、介護福祉士国家試験を目指し介護技術の
専門的な知識や技術の習得だけでなく、医療
的ケアや地域共生社会への理解も深める学習
を行っています。国家試験の受験が必要とな
った第30回以降、受験者は全員合格。小規
模校ならではの、一人ひとりに合わせた学び
を実施し、子どもからお年寄りまで幅広く対
応できる福祉人材を育てています。

利用者との関わりだけじゃない 介護の仕事

規定部門 優秀賞に「ふくしまる」、エビ
ソード部門 審査員特別賞に「QOL（クオリ
ティ・オブ・ラブ）」の2チームが輝きました。



介護福祉学科のみなさん



表彰式の様子



受賞作品の動画は
こちらから



両チームともに、面白さやオリジナリティ
を求め、審査員やこの動画を見てくれた方の
目に止まるように工夫しました。「QOL
（クオリティ・オブ・ラブ）」チームは、実
習でのエビソードを基に、自分たちならどう
するか考え動画を作成しました。「支援の温
かさ」を利用者との関わりのみで表現するの
ではなく、職員同士の支援検討会の場面を入
れ込み、裏方の仕事にも視点を当てました。

相手に合わせたケアをしたい

保育士の資格を持つことが入学資格の介護
福祉学科。ほとんどの学生が同大学の保育
学科を経てから介護を学んでいます。

「どんな専門職になりたいか」そんな問い
に、降旗 蓮さんは「自分自身が、こういう
人と括られるのが嫌いなこともあるのですが、
単に利用者と括らず、その人その人に合わせ
たケアをしていきたいです」と答えてくれま
した。

学生全員がこの春から、県内の保育施設や
介護施設での就職が決まっています。相手に
合わせた温かい支援が県内に広がることを期
待します。

●ご感想、お問合せ、
掲載希望等は下記へ
お寄せください。

長野県社会福祉協議会
総務企画部 企画グループ
TEL 026-228-4244
FAX 026-228-0130
E-mail kikaku@nsyakyu.or.jp

webでもご覧になれます

長野県 福祉・
社会福祉協議会 介護べんり帖



長野県福祉研修
共同サイト
きゃりあねっと

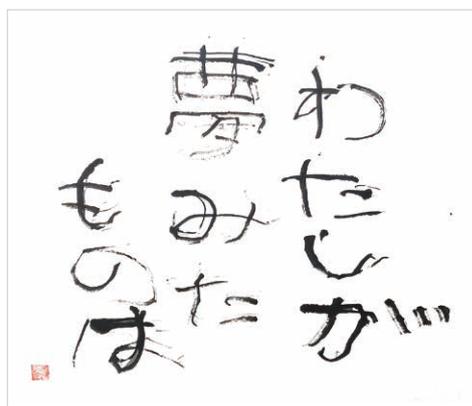
信州福祉・
介護のひろば



ざわめくアート

『墨書』

作者・徳永 めぐみ(とくなが めぐみ)
長野市在住



墨遊びのアートワークから生まれた作品。
徳永さんはうら若き夢見る素敵な女性である。あまりおしゃべりはしない寡黙な人
だが、月に一回のアートワークの場に参加し、黙々と絵を描いていて、それはファン
タジックな絵になっている。まさに夢見る乙女。

墨遊びは一對一の対面のワークなので、頃合いを見て「すみやろうか？」と誘って
いる。どんな文字、言葉を書こうかと聞いてもなかなか本人から言葉は出てこないが、
彼女が描いた絵から思いついて、いろんな夢があるんだね、これから一杯やりたいこと
あるんだね、と伝えて、こんな言葉を提供した。障害ゆえに手足の動きに不自由さ
があるが、そのおぼつかない手から生まれる墨の痕跡には、だからこそなんととも味わ
いのある線が生まれる。

(ながのアートミーティング 取材)